聖武開天記に就いて

石濱純太郎

察罕の「聖武開天記」の名の初めて見えるのは「元史」百三十七列傳卷第二十四の察罕傳であつて、「且詔譯帝範、又命譯脫必赤顏、名曰聖武開天記、及紀年纂要太宗平金始末等書、俱付史館」とある。所が清の邵遠平の「元史類編」卷十四察罕傳では之を改めて、「且命譯帝範及累朝起居注、名曰聖武開天紀、并述太宗平金始末、俱付史館」として記の字が紀の字になつてゐる。「元史類編」の中には明かに聖武開天紀として引いた文は無いが、卷首の引用書目には聖武開天紀を載せてあるから目睹したものに違ひない。

然るに清の李文田は「聖武親征錄」を校注した時に元史に據つて、「然則此卽聖武開天記。其又名爲皇元聖武親征錄、當由傳寫改變耳」(一)と云つて兩書は同じものであると斷定した。我が那珂通世博士も此說を承けて、「察罕の祕史より譯し出せる聖武開天記の名は後世に少しも聞えず、親征錄の名は元代の書に少しも見えずして、親征錄の內容は祕史に本づきたりと見ゆれば、親征錄は卽ち開天記にして、傳寫の間に標題を改められたりと見て誤り無からん。清の康熙二十八年に邵遠平の著せる元史類編に屢今の親征錄の文を引きて聖武親征記と云へり。然らば三名一物にして元の聖武開天記は清の初に至り聖武親征記となり、乾隆中に至り聖武親征錄となりて、その上に皇元を冠らせたるなり」(二)と「成吉思汗實錄」の序論に述ぶるに至つた。案ずるに開天記と親征錄とが內容の上に於ては殆んど同じ樣なものであつたらう事は推測するに難くはないが、同じ物であるかは未だ確かではない。殊に「元史類編」では親征記のみを引いてゐるが、引用書目には判然と

開天記の外に聖武親征紀を掲げてゐるのだから、兩書の別物である事は明かである。固より今の親征錄が親征紀である事は其引用文が之を證する。

清の王靜安先生が「聖武親征錄」を校注するに及んでは兩書の別物たる事は證せられた。其序中に之を考證して云ふ、「顧開天記譯於仁宗時、而此錄之成確在世祖之世。今本癸亥年王孤部下有原注云今愛不花駙馬丞相白達達是也。考閻復高唐忠獻王碑、及元史阿剌兀思剔吉忽里傳、愛不花當中統之初已總軍事、又其子闊里吉思成宗卽位封高唐王、則愛不花之卒必在世祖時、而此錄成時、愛不花尙存、則非察罕所譯之開天記明矣」。此論證は精確で議すべくもない。愈々以て兩書の別物なるは疑ふ可きでない。

親征錄は諸君の校注によつて世に傳播せられたが、開天記は埋沒して知られてゐないのである。或は堙滅に歸して了つたらうか。茲に「清吟閣書目」卷一鈔本の中に其名を留めてゐる。

聖武開天記一卷　影元鈔本　吳騫跋　元察罕一本

清吟閣は錢塘の瞿世瑛の築く所。彼は罕見の古書を手鈔し以て日課となしたと云ふ。清吟閣鈔本にして吳槎客の跋があるのであるから、此本にして今に傳存してゐるならば、聖武開天記の眞面目を發現し得るであらう。此書の發見こそ期待に堪へない所である。

注①「那珂通世遺書」本「校正增注元親征錄」による。

②二十八年の二の字は三の誤植だらう。邵遠平の凡例に依ると「是編成於康熙癸酉之秋、進呈於己卯之春」であつて、癸酉は三十二年、己卯は三十八年に當るから博士は進呈の歲を記したものであらう。筑摩書房本も尙ほ原本の儘である。

③「王忠愨公遺書」三集本による。序は別に遺書本「觀堂集林」卷十六にも收錄されてゐる。

④吳氏雙照樓刊「松鄰叢書」乙編に收む。

⑤楊立誠金步瀛合編「中國藏書家攷略」(民國十八年杭州刊)による。